

『チーム水・日本』



丹保憲仁
論説委員長

北海道大学・放送大学名誉教授
中央大学研究開発機構教授

21世紀も最初の10年が過ぎようとしている。21世紀は水の世紀であるといわれている。「地球上にある最大資源量の水」、しかも「太陽エネルギーによってほぼ10日のサイクルで降水として地上に戻る高速循環資源である水」でさえも、いまのままの使いかたでは、大増殖しつつある人類の未来があやういと考えられ始めている。清浄な水の供給、食糧生産の持久、生活・自然環境の保全、災害の防除、地球温暖化への対応、といった巨大で複合的な水問題に世界を挙げての取り組みが始まっている。

わが国でも、幸いにして、政・財・学・官の力を集めて「チーム水・日本」(事務局日本水フォーラム)が発足し、具体的な活動が各方面で始まった。政財界が内国的な社会基盤システムを、世界に通用する日本発のシステムとして世界にむけて努力するのは初めてのことである。社会基盤施設としての水システムを日本発の世界標準にしようと考え始めるのは画期的なことである。どのように考えることが必要かの私見を述べてみたい。

1. 背景は、世界人口100億人の時代を射程に入れた、『21世紀は水の世紀』(地球上に最大に存在する高速循環資源すら不十分になること)への基本的かつ現実的対応を日本の英知を集めて具体的に提案することである。
2. 世界に先駆けて、人口飽和、人口減少社会(少子、長寿命社会)を迎える超先進国日本を意識化し、未来社会の先達となり、世界の尊敬を得られるか否かが日本の指導者と国民の肩にかかっている。食料自給率が、穀類基準28%、カロリー基準38%、コスト基準70%をどう見るか、エネルギー自給率5%以下をどう見るか。多くのものをしかもかなり贅沢に外国に求めなければならない現在の日本は、太陽エネルギー基準(グリーン視点)での国土の収容力に比して、大過剰な人口1億2千6百万を持つ。日本の未来を、膨張し続けるアジアの未来とどう組み合わせるかが今問われている。「日本が近代の閉塞後の新文明の創生者として国際社会で名譽ある地位を占めることを追求し、其のことで日本人が健全に食べ続けることを両立させねばならない。」
3. 日本の自然は、水資源量(降水フラックス)では世界でかなり恵まれている国である。しかし、超高密度利用(活動)によって、平衡が崩れている関東・東海メgalopolisは、一人あたりの水資源賦存量で見れば、世界の最寡水地帯の一つである。世界には極端に、水資源量(降水フラックス)の小さい国がある。半乾燥地帯、乾燥地帯である。絶対的資源量の不足地帯である。この両者にも使える普遍的水システム創

生の哲学がある。「水利用は質の利用である。」利水の本質を表現した給水・排水システムは基本的にはまだ成立していない。近代の次の時代(21~22世紀に始まるであろう後近代に向けて)の世界標準として、「質利用が利水の本質であることを意識化した」水使いの技術と法体系を検討し、具体的な技術標準を提案し、其の運用システムを構想していくのが、チーム水・日本の基本スタンスとなろう。

4. 近代システムは、それぞれ縦割りで、類型ごとに部分最適化をはかり、出入を評価してきた。既存のシステムは、技術、法体系が新しい時代に移るための出発点とはなるが、其の個々の延長線上には開けた未来はなさそうである。議論と努力の成果は、基本構想、現在からの展開、技術の洗練、運用の工夫、いずれも横断的なグループを実質的に構成できるか否かに大きくかかっている。現在の縦割り水システムが、甲(発注者)、乙(受注者)、時には丙(具体にはそのように定義されることはないが、部品のサービス者、乙のカテゴリの下位者・下請け)の順に意思決定権があり、部分システムの法体系と技術・運用基準がマニュアル化されて、左右上下ともに要素の自由度が少なく、基本概念・哲学が陳腐化し時代の必要に合わなくなっても全体としてフリーズしてしまい、新たな展開を見せることが難しい。現行法体系・施工規則・技術基準の融合・刷新が、第一の仕事となる。
5. したがってチーム水・日本を構成する諸活動チームは、自立(律)的運営が基本であるが、現用システムの自己強化を目的にしてはなるまい。システム部品の性能向上は日本技術の新展開に不可欠であるが、部分最適化、自己運動保存を避けて、新文明への寄与(日本の新しい水システムの提案・構築)を常に活動の視点に含みたいものである。国内の水問題解決能力と国際的活動は同次元のものでなければならない。学問、技術、経済に国の内外がなくなっているときに、現行の日本の内国的水システムの仕組みはいかにも古い。水以外の基盤システムとの連携も弱い。
6. 新文明を作る志が、過剰人口国日本の未来を明るくするはずである。金が儲かるかどうかの近視眼で行くならば、实体经济(技術)よりも金融資本の売買ゲームをやればよかったわけであるが、其のバブルもはじけた。日本は輸出で食ってきた。がんばった自動車、電気・電子、機械等の産業も困難に遭いながら、新しい時代に向かって努力を続けると思うが、内国的な仕事とされてきた社会基盤施設の大きな一つである日本の水システムの世界に働く人々が、世界基準の新文明の創生者として立ち現れて、次の時代の世界をリードするデファクトスタンダードを提案し、尊敬を持って世界に受け入れられ、日本の大過剰人口を養う国際化活動の戦列に重要部門として加わりたいものである。我々“Civil Engineer”も、その字義通りに、100年ぶりに総合文明の牽引車の主体として働きたいものと希求する。